・書評・

『経済発展と農業金融』

伊東譲著

市岡幸三

一、人と分析視点

著者は農業経済学会にあって、数少ない農業金融研究者の一人である。僭越な云い方であるが、人は、ともすれば研究の過程で、自分の立っている足場を踏みはずしたがるという弱点をもっている。しかし、著者の場合はそうではない。研究をはじめられてから十数年来、金融というベースは常に著者のものであり、その視点に立って農業諸問題の探究に情熱を注いでこられたのである。著者を知る者の一人として、こうした大いに範とすべき学究態度は、真すぐ著者の未来に通ずるそれであることを疑わない。

そういう意味で、本書は、著者の一〇年ひと区切りの一里塚であるとともに、内容豊かな研究成果の集積でもある。

それでは、本書はどのような視点から分析されたものであるか。本書に一貫していえることは、農業金融をそれ独自のものとして分析するのではなく、農業と非農業との相互依存関係を、金融という側面から究明しようとされたことである。著者が、この分析視点を選んだ意味は、はしがきにもみられるように、現実の農業は孤立して存在するのではなく、国民経済ないし経済一般と相互依存関係にあるという認識にもとづくものである。さらに、こうした視点に立つことは、農業金融の分析と直結するという便宜さのためばかりではなく、それには次のような従来における農業分析方法への反省が一つの因となっていたのである。それは、従来における農業分析はあまりにも実物過程への分析にのみ偏りすぎていたということである。さらにまた、従来の農業金融分析は制度論的叙述に止まり過ぎていたということである。いってみれば、全経済過程の中で計量経済学的にマネタリー・アナリシスがなされなかったというのである。こうした分析視点に立てば、そこでは必然的に資本への概念を、はっきりと設定してかかるという必要に迫られる。そこで著者は、資本を狭く物的資本であるとは考えないで、シュムペータおよびハーンーの主張にならって、広く、購買力一般と考えて

分析に入るのである。

二、本書の構成

本書は理論編と実証編とから成りたっており、両編とも明治三〇年頃から第二次大戦終了時期までを対象として分析されている。理論編でなされようとしたことは、日本経済の不均等発展と、それと有機的関係にある投資の傾斜的配分といった、おなじみの論理構成の中へ、信用論（ないし金融論）をいかに位置づけるかという点にあった。また実証編では、右期間に存在した各種の農業金融機関の金融的機構を統計的に究明されようとしている。

いま叙述の順に従って、その内容を簡単に紹介してみよう。まず第一章では、外国資本に依存することが少なかった日本経済の高度成長が述べられ、その成長を可能とした高い貯蓄率と高い投資率とが説明される。ところが、産業部門別にみると成長率は第一次産業部門が低く、それは低位成長部門の貯蓄が高度成長部門へ投資として再配分されたからだと説明されるのである。これらの理論ないし実証は大川一司・篠原三代平・都留重人等の諸教授に代表的にみられる諸説であり、著者としても本書のイントロダクションとして引用されたに過ぎない。著者が最も力点を置いたのは、貯蓄の再配分を媒介する金融のメカニズムを論証するとともに、それの理論的位置づけというところにあったのである。

そこで第二〜三章では資本の農業外流出という見出しのもとに著者の独壇場が展開される。まず、貯蓄（ないし投資）配分の問題は、信用配分の原理を明らかにすることによってもとめられるとし、われわれが慢然と用いていた資本制限という概念に緻密な吟味が加えられたうえで理論構成が進められていく。

まず当然の順序として、シュルツおよびその学派の人達（ジョンソン、ヘディー）のいう資本制限 Capital rationing が俎上にのせられる。実物資本の限界効率よりも利子率の方が低いにもかかわらず農業へは資本が入り難いというヘディーの実証的研究は、シュルツの資本制限論の実証的論拠をなすものである。シュルツによれば、それは農業における不確実性のなせるわざであり、このことは農民の資本需要表と金融機関の資本供給表とを、ともに下方へシフトさせ、ここに農業資本の内的制限と外的制限とが生ずるというのである。そして、シュルツは外的制限の方を重視するが、その説明は充分ではない。

この点を究明すべく著者は、シュルツが拠りどころとしたハートの資本制限論に説き進むのである。まず金融機関がいだくところの不確実性の存在―資本の外的制限の原因―についてはシュルツもハートも同じような理解に立っている。しかし、ハ

ートによれば不確実の度合いは、産業により、また企業によって同じではなく、それを危険打歩として利子率に組みいれた現実の実効利率は不確実性の程度に応じて一様ではない。それゆえに、その利子率によって描かれた供給曲線は右上りの段階様の形となるのである。ところが現実の金融市場には制度的に決められた利子率の最高限が存在し、その利子水準以上の利子率では貸せられないのであるから、危険打歩を織こんだ実効貸付利子率が制度的に決められた利子率以上になるような貸付は制限せざるを得ないこととなる。これがハートの資本制限論の骨子である。そうして、そこでは段階的利子率、利子率の最高限等が示すごとく、ハートの資本制限論における利子率は、われわれの考える純粋利子率よりは極度に硬直的なのである。また、いま一つ著者が強調するのは、シュルツにおける資本は物的資本であるが、ハートの資本は購買力一般としての資本であることである。その意味で、ハートの資本制限こそが本原的な資本制限であり、著者の分析視点からすれば信用制限と呼ぶべきであるというのである。

さて、ハートの信用制限論を農業に適用すれば、どうか。著者はまず現実の金融市場を組織された金融市場と非組織金融市場との二つに分ける。前者は制度的な金利規制を受ける金融市場であり、後者は金利規制を受けないに等しい金融市場である。農協・銀行等のごとき近代的な金融機関は前者に属し、頼母子講、個人等は後者に属する。こうして金融の二重構造のもとで、農業金融はどのような様相をもつか。まず農業は大企業などと比べて不確実要因が大きいことが前提される。それゆえに、組織された金融市場においては農業への資金供給表は、工業などよりも早く利子率の最高限にぶつかり、それだけ信用制限も大きくなるのである。そうして、最高限以上の利子率でも借りたいと思う農民は、非組織金融市場で高利の資金供給を仰ぐこととなる。昔から存在した農業への制度金融も、実は非組織金融市場から農民を守るために設けられたのであるという。

つづいて、農業資金の農外流出についてはどのようにいえるか。著書は農業構造の変動分析を通して、その要因の指摘を企てる。つまり、農業所得は価格伸縮的で産出量硬直的である。そして、後者の特質は農業生産の硬直性、農業投資の安定性、農家消費の安定性等によって説明される。これらのことは、農民が価格変動に対して、きわめて不安定であることを示すものであって、景気変動に際してはその両極面を露呈する。いまそのメカニズムを貨幣的側面からみると好況期には農業所得が増大しても、その割に農業投資や消費支出・証券投資等は増大しないので、預金はふえ、したがって非農業への資金流出が起る。反対に不況期には所得低下ほどに農業投資や消費支出は減少し

ないので、農家経済は悪化して負債が増大するのである。他方不況期には非農業部門の投資減退が生ずるので、農業負債の大部は非農業部門から流入する。

理論編の最後の部分では、従来の所説との関係から著者の信用理論が展開される。とくに東畑精一博士の農業信用理論、大川一司教授の所得との関連は興味深いものがある。

実証編では日本勧業銀行・農工銀行・産業組合系統金融機関等の金融的足跡が、多くの統計資料によって描きだされる。ただし理論編と比べれば、いささか軽い感じのする点は免れない。また、充実感の溢れる理論編とのかけ橋が、景気変動と資金流出入という一点で結ばれていることは物足りなさを感じさせる。

三、価値ある未完の書

書評というからには批判しなければ意味がない。しかし、著者がすでに自ら気づいている点に批判のメスを加えたとしても、それは決して著者への批判とはならない。正直なところ、この本を一読して感じたことは、著者自らが不満と思う点が、私にとっても大きな不満であったことである。

たとえば、実証編を読んで、これでは利子率以前の金融論ではないかと思った点が、著者によってもことわられている。また、精緻に準備された理論が、実証編において充分に生かされ

ていない。つまり、本書の中心であるところの信用制限論と実証編とのつながりも、本来ならば農業内部の諸指標（投資、資金需要等々）との関連において実証的に明らかにしなければならないことである。さらにまた、農業と非農業との関係を貨幣的側面において分析するという視点からいうならば、単なる貯蓄率の分析では不充分であり、さらに立入ったところの農民の資産選好にまで進むべきである。しかし、ここに指摘した諸点の大部は、著者もすでに「資料の不備によって分析できなかった」とことわっておられるところであり批判の余地はない。また戦前の産業組合を、金利の最高限に服する金融機関と決められる点についても、戦後の事情からすれば必ずしも当を得ていないと思われる。が、云われるように当時の利子率のデータのない状態では批判しても水かけ論に終ってしまうのである。

ともあれ、客観的にみれば、右に指摘したような理由によって未完の書であることには変りがない。しかし、だからといって価値が小さいというのでは決してない。こうした視点から分析された書物は日本では始めてであり、書かれた限りにおいては内容も充実感に溢れていて示唆を受けることも甚だ多い。近い将来において完成された大書となることを願うとともに、東畑精一博士の農業信用理論を、ここまで発展された著者の労を多としたい。